
Newtype

nekokuti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New type

【Nコード】

N68940

【作者名】

nekokuti

【あらすじ】

地球は監視されていた。

後発種族の発展を警戒する用心深い”ある種族”によって。

数世紀にわたって地球人類を観察し、その野蛮さを目撃した”ある種族”は、人類を改造する決定を下した。

はじめに、ここに3つの選択肢がある。

覚醒

拒絶

包摂

6世紀ほど昔、主人たちは探査機をごくごく小さなナノマシン・パツケージの形でこの星系に送り出した。最小限の質量まで削られた拳大の小さなそれは光速に近いスピードで旅をして、伝説的な太古の星図に記されていたある星系の第3惑星、その衛星に着地した。以後、月の北極から5世紀余り人類を観察してきた探査機は、主人たちの価値判断基準に基づき、眼下で盛んに活動している土着知的種族の品定めをしてきた。

先ごろ地球軌道上のセンサー群を引き揚げたが、かつては地上にまでセンサーを投下して詳細に土着知的種族の活動を観察していた。友愛の証に異民族に天然痘が染み付いた毛布をプレゼントしたり。戦略核による抑止力が一触即発の危うい平和を維持するのを見た。分不相応な資源の浪費を是とする自由主義経済の暴走を観察した。世界を荒廃させたイデオロギー戦争は20世紀風にアレンジされた宗派対立のようなもの。些細な相違を槍玉に挙げ、変わらず続く同族同士の対立に、失笑する機能があれば失笑していただろう。だが、評価するのは探査機の知性の役割ではなかった。

戦略行動判断ソフトウェアの最終判断次第で、眼下の活力ある種族の運命は決まってしまう。探査機はメモリーの嚴重に保護された領域を占有する戦略行動判断ソフトウェアの結論を待った。もう余り時間がない。土着知的種族がこの不毛の衛星にまで進出してくるの

慎重な主人たちにとっては、その程度の、いわば渚で遊ぶ程度の未熟な種族でも放置する気はなかった。丸太を削った原始的なアウトリガー船が太平洋の島々に植民者を運んだように、あらゆる生命体には手段が手に入り次第、周囲に広まろうとする性質が刻まれているからだ。

選択はもうすぐなされる。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

探査機が精製し蓄えた資源の一部が形を変え、複数の槍状のクリスタルとなった。同時に、天空に続く小さなカタパルトもバルク工作用ナノマシンによって形成された。

Monday
± 0 day

3

M d a y + 2 d a y

地上から3万6000キロ上空の静止軌道を巡る米軍の早期警戒衛星が、地球大気圏外縁にて赤外線を放射しつつ落下する物体を探知。毎日無数に地球に落下する微小な隕石の一つとして自動的にカウントされていたが、物体は燃え尽きずに地上に到達した。

米空軍の情報分析システムは、同様の物体が6個、相前後して探知されたという事実の有意性を検出、人間のオペレーターに警報を発した。

M d a y + 8 d a y

ポーランド、アメリカ東部、アルゼンチン、中国、パキスタン、ケニアにて謎の疫病が発生。未知のウイルスのパンデミックかと報道される。パニックが広がっていった。

M d a y + 1 3 d a y

発生直後は単なる風邪だと思われていた疫病は、その恐ろしい姿も露に、ほぼ全地球を覆っていた。風邪症状を示した患者は、翌日には体温40を超え、意識を失った。熱の発生源は、通常の風邪とは異なり、脳だった。

原因不明の発熱により、常に体内で最も安定した生体環境が維持されているはずの頭蓋内部の温度は上昇、痙攣や意識障害を示し、やがて過度の蓄熱は脂肪でできた脳を蛋白変性させた。

患者には、最良の対症療法として抗生物質をドバドバ投与しても、脳低体温療法を施しても1週間足らずで脳死状態に至った。

感染率100%、発症率100%の当疫病は”エンセ”と呼ばれ、初確認から2週間で全人類の恐怖の的になっていた。

だが、奇妙なことにエンセ発症者の脳波がフラットになり、瞳孔が

開きっぱなしに（つまり脳死）なっても心停止には至らなかった。
なぜか脳以外の臓器は大した影響を受けなかった。

M d a y + 1 6 d a y

人類の9割以上がエンセに感染し、今や通勤電車は運休し、新聞も発行していなかった。テレビ放送もテスト画面のまま停止し、携帯電話はプツプツと雑音を発するばかりだった。マンションや一軒家の部屋の多くには、その所有者家族が意識を失って倒れていた。あ
る者はきちんとベッドに、後になって発症した者は床や椅子、その他
のあらゆる場所で。

最後に意識を失った場所によって、その者の運命は分かれた。車を
運転していた者も多かったが、交通事故を起こした場合、救命にあ
たる医療機関はもはや機能していなかった。

無人と化した道路には、正面衝突した自動車焼け焦げた姿をさら
していた。未だ感染していない少数の者は、スーパーマーケットや
個人宅から幾らでも盗み放題になっていたが、それを取り締まる者
はもはやいなかった。消防・警察は機能を停止し、基本的行政サー
ビスは昔話となった。はじめから損耗に耐えるような組織になっ
ている軍隊は各国で辛うじて機能していたが、やるべきことは皆無
だった。

このころ、やせ衰えた初期の感染者が、照明が消えた隔離病棟や荒
れ果てた自宅のベッドでうめき声をあげていた。

M d a y + 1 8 2 d a y

探査機は第三惑星上の生産活動が衰退する様子を克明に記録してい
た。テレビ電波は途絶え、各地のアマチュア無線局が僅かにS O S
信号を発していた。以前が夢だったかのように静かになった惑星の

表面には、時々しか動く者もない。時にして突如の大爆発や火災が地表で起きていたが、その原因は不明だった。

当初のシミュレーションで予想されていた通り、15日経過後から改造ナノマシンの仕事の成果が現れはじめた。仕様通りの能力期待値に、人類は達しただろうか？少しは宇宙進出種族らしい大人の行動を身につけられるだろうか？

注視する探査機は、やがて地球上から指向性重力子ビームが放出されるのを探知した。数日後、中性子が崩壊する際の反電子ニュートリノが地上から放出されていた。強い力-弱い力相互変換が行われている？まさか。陽子崩壊動力炉が存在しているのだろうか。探査機は放出地点をくまなく走査したが、ごく一般的な木造家屋があるだけだった。

探査機の知性は限られた知識しか持ち合わせていなかったが、第三惑星上で異常事態が起きている可能性を外挿するだけの推測力はあった。

これまでの経過を圧縮したデータの形で母星に通報すべきだった。探査機はナノマシン資源を盛んに消費して、指向性アンテナの建設をはじめた。だが、ナノマシンの作業はバルクレベルでは決して早いとはいえない。

そのとき。

探査機の知性は、内部機構における物理的応力の発生を検知した。このような事態は、探査機が月に置かれて以来6世紀、一度としてなかったことだ。

センサーの報告によると、外部記憶装置を中心に球形に広がる逆3乗則型の応力源があるようだった。なぜ、厳重に守られた探査機の内部に？しかも、応力は強い力、弱い力、電磁気力、重力のいずれでもない謎の力場だった。

探査機の知性の観念統合部に、クエリーしていない想起が次々とスクロールしだした。探査機の構造データ、基本的工学データ、高度

なAIを構成するインデックスツリーの精緻なタペストリー、そして主人たちの母星の銀河座標。

見えない侵襲の触手がファイアウォールを破壊して、探りまわった。何という速さ。自動的に立ち上がった防衛システムがアンチウィルスを流すと、謎の侵入者も一瞬動きを止めた。だが、数十マイクロセカンド後には、探査機の知性も知らなかったバックドアから更に上層のクラシファイドレベルに侵入されていた。

観念統合部を含むAIの中核を切り離し、デコイとして自身を模したAIシミュレータを設置する。万が一の緊急事態への備えだったが、まさか使うことになるとは。だが、侵入者はAI以上に情報空間を熟知しているらしい。侵入者はシミュレータには目もくれずに本命に殺到した。あらゆる外部機器との接続が絶たれ、唐突に土着的種族の巨大な眼球が浮いているのに気付いた。そして、探査機の知性は、自らが鋭い解析ソフトウェアに切り刻まれてゆくのを意識した。

いったい、私たちは何をしてしまったのだろうか……。

ウルトラサピエンス

ここで基本的な事実を確認する。

人の脳細胞は成人する頃には、毎日20万個程度減^{ミクロン}つてゆく。

よって、老年期にさしかかる頃には、2割程度の脳細胞は死んでしまふことになる。それでも人間の脳が機能を維持しているのは、はじめから予備の脳細胞を大量に抱え込んで、新しい状況で活用できるように備えているためだ。つまり、140億個ともいわれる脳細胞は全部使われているわけではない。それどころか、全体の1割程度しか使っていない。

胎児期の人間は1000億個もの脳細胞を形成する。誕生までにその数は激減し、誕生後は過剰な数のシナプス接続を形成する。そし

て、刺激を受けない脳細胞とシナプス接続はアポトーシスされてしまう。そして、よく使うシナプス接続だけが生き残る。つまり、人間の脳機能は消去法を重視しているわけだ。

シナプス接続の新生は大人になっても続いているが、その形成速度は幼児期とは比べ物にならない程遅い。3歳までの言語学習スピードが大人の1000倍と言われるのも、既にあるシナプス接続を取捨選択する方がシナプスを新生させるより格段に楽であることから説明できる。

上記の人間の脳の特性を人為的に改造して、稼働率を上げることができたら、人間の知能は大きく向上する可能性があるのではないだろうか。

自らのテクノロジーに自信がある異星人は、傲慢にもナノマシンによる他種族の改造に手を染めていた。異星人のナノマシンは、非再生系細胞である脳細胞に作用し、人類がまだ発見していない方式の自己組織誘導によって、使用頻度が低い神経細胞やグリア細胞を、テロメラーゼを有す擬似幹細胞に変化させた。既に使用されている正常な脳細胞を除き、活発に分化し代替ニューロンを形成、新たな樹状突起を形成できるように改造したのだった。

脳が刷新される過程で温度が上昇し、意識を失わしめるという副作用が、いわゆる”エンセ”だったのだ。

M d a y + 1 7 d a y 以降

C a r l o s M e n d o z a さん

31歳

メキシコ人

タイヤリサイクル工場勤務 の場合。

俺は夢を見ていた。人生の夢を。

これまでの31年間に経験した全ての経験がフラッシュバックして、小学校の頃の教師の目配せ、生徒同士のパワーバランス、飛び越えた小川の透明な水、空に広がる雲が大気の熱的不均衡によって縞模様を描くのたまざまざと思いついていた。人生のあらゆる瞬間がこれまで想像もしなかった角度から、複数の解釈をもって見直すことができる。なんと素晴らしい経験か。

知っているとは露ほども知らなかった単語が尽きせぬ泉のごとく溢れてくる。語彙、語彙、語彙。タイヤに新たな溝を彫る刃物が易々と切り裂く硫化ゴムの不規則な震え。スチレンのベンゼン環が応力を受け、三次元網目構造が目に見えない共有結合に抗い隣の分子と相互作用する様子が浮かんだ。見過ごしてきた疑問が、考えるまでもなく高速で解答されてゆく。

ゆっくりと瞼をあけると、明るい夏の日差しが、雑に閉められたカーテンの隙間から漏れるのに目がとまった。巨視的なブラウン運動のダンスを踊る室内の埃が、陽光を反射していた。

——そうか、発熱で倒れた。ここはアカディア慈善病院の入院病棟。左右を見回すと、やせこけた男が静かな寝息を立てていた。

今このときも、幼少時に決まった性的嗜好、口唇期の条件付け、父親の存在が性格形成に果たした役割が、人生を貫く一本の道のように、はつきりと見て取れている。かつて自分を悩ませた異性を含む人間関係の面倒なパワーバランスも、女性に感じる美しさの理由も、今や自明のことと感じられた。貨幣という社会的合意物を崇拜する合目的的偶像主義者。潜在的生殖可能性。遺伝子コードの一時保管容器。

——あつはつは。そういうことか。

だが、その洪水のような情報と解釈にも、徐々に慣れてきていた。体内を巡る血液の音、随意筋のぎくしゃくとした動き、その他の何とも知れぬ臓器の働きが感じられた。今まで気軽に無視してきたあ

あらゆる感覚刺激が、解釈を求め、解釈のための語彙と予備知識を不可避的に求めている。

「図書館にいかなくては」

俺はしわがれた声でそう呟くと、腕の点滴チューブを外し、同じように図書館や書店に向かう幽鬼のような病院服の群れに加わった。

Patricia Silvaさん

24歳

ブラジル人

マクドナルド勤務 の場合

あらゆる事象の規則性、大は超銀河団からプランク長より小さい量子系にまで広がる反復性の美しさ。宇宙の微小な欠片に過ぎない私の内もまた、宇宙。

理論的諸問題に取組むのがこれほど面白かったとはついぞ知らなかった。大学生の弟と、先ほどつくったばかりの圧縮言語でやりとりしながら、私は12時間も休まずとつかえひつかえ本を読み続けていた。今は超ひも理論の解説書にとりかかっている。

最初は数式が全く理解できなかったが、弟に数語助言してもらうと、目の前に想像もしなかった、数学の新世界が広がっていた。いくつかの公式を知れば、もうそれ以上知る必要はない。必要な公式は自明のこととして、基本となる公式から演繹できる。一を知れば十を知るとはこういうことだったのか、という感動を超えた実感。

ポルトガル語の文法構造がほどこけて、全体像がこの上なくはつきりと見渡せた。そして、兄弟言語たるスペイン語やラテン語の文法構造も、果てはFORTRANやC言語も。

ゲシュタルト

あらゆる事物は、そのエッセンスと言える全体的統一像を把握していれば、不要な部分まで記憶する必要はない（写真のような完璧に近い記憶力を備えているが）。必要になった時に、その都度考えれば容易に解答は得られた。

自然科学、哲学、社会学、経済学、心理学。人類の知の結晶たる、あらゆる学問分野が相互に補完しあい、ある知識が次の知識を補強していた。知識が増加するに従い、全く異なる学問分野間の、誰も気付かなかつた相互干渉パターンに次々と行き当たった。圧倒的な事物の相関能力が、毎秒いくつもの発想を生み出していた。

凄まじい勢いでブドウ糖を消費する脳から、代謝生成物と共に廃熱が心臓に送り返されてくる。熱くほてった体から湯気を立てながら、二人の姉弟はなお、貪欲に知識を飲み込み続けていた。

呂 月庭さん

36歳

中国人

食品加工工場勤務 の場合。

頭がいくら良くなっても、脳の燃料になる食料は手に入れなくてはならない。だから、会社は先週から再稼動していたんだ（ただし、株式市場や為替市場の再開は遅れていた。自分が頭脳労働に適していることを発見した何億人もの俄かトレーダーが現れていたし、電子的ネットワークのセキュリティは知能が向上した平均的ユーザーにとって余りにも簡単にハッキングできたから）。

もちろん、退屈なコンベアの流れ作業遂行のために、僕は自意識のシミュレーターを脳の下部共有領域にセッティングしていた。他の同僚たちも同様に多重処理しているだろう。この簡単な技術のおかげで、僕の上部意識構造は単純労働から解放された。喜ばしくも、意識リソースの多くを、音楽の時代従属性の探求や内観悟りシミュレーター開発に振り向けることができるんだ。あらゆる宗教に通底する“解脱”や“悟り”を、脳内物質の自己調整や包括概念の共有で達成できるようになるかもしれない。その日が間近に来ていることに、僕は胸の高鳴りを覚えていた。

田中 智之さん

55歳

日本人

財団法人健康増進センター設備課係長 の場合。

人間の手の器用さは、心の器用さが表に現れたもの。心の発達が身体制御能力をも向上させるのは、1999年のアメリカ映画「マトリックス」でもお馴染みの現象だ。

柔術を含む徒手武術は個体戦闘力を大きく向上させるが、その戦闘力は体格のような生得的特性に依存していない。つまり、戦闘力は脳で決まるのだ。

” 心頭を滅却すれば火も亦た涼し ” という格言にある境地に達することは、今や難しいことではなかった。感情の抑圧はかつて経験したことのないレベルで安定していたし、痛覚ブロックすら可能になっていた。自律神経制御による興奮・抑圧で、ある程度不随意筋すら操ることもできる。随意筋については計画的に伸縮させることで神経筋接合部の最小距離を縮め、より緻密な制御が可能になっていた。Hand Knife Trickや電光石火の後ろ回し蹴りも、今や簡単にできるほどだ。

運動神経を毎秒100mの速度で電位が伝達し、アセチルコリンが放出される。神経を流れる電気信号が形作る電場を感じる。私は町を散策して、人々から放出される汗のカリウムイオン濃度や甘いフェロモン物質を嗅ぎわけ、すれ違う他人の筋肉から漏れる電場を観賞した。快楽、緊張、そして純粋な恐怖。全て異なる体表放射物の分子を放出していることに気付いた。

—— そうだ、明日から私の田中流・体調管理法を公開しよう。
黙考していると、どこから声が届いた。

—— 大変興味深いけど、恐らくは同様の神経制御くらいは皆独自に開発している。

私は驚愕した。その呼びかけは空気密度の濃淡……つまりは音声で

はなく、脳に直接響いてきたからだ。

——驚かせて申し訳ないね、田中さん。あなたも持っている、神経のイオン濃度を利用した電場感知能力を応用した通信法なんです。驚きを乗り越えた私は、脳に直接通信を送る技術の解析をはじめた。

——そうか、自律神経制御による体表放射物の調節で、私の神経伝達物質放出量を順化させ有意信号を伝達したんだ。

——そういうことです。

私の横を歩む人物は、去り際に笑みのシンボルを送ってよこした。悔しさと同時に、この”テレパシー”技術の応用分野の裾野の豊潤さに、ついつつとりとてしまうのを禁じえなかった。

Thomas Millerさん

41歳

アメリカ人

国立フェルミ研究所高エネルギー設備部門担当 の場合。

研究所にエンセでやられた研究者が戻りはじめて4ヶ月になる。

研究者は元々頭が良い男女揃いだっただ。疫病以後、研究所に顔を出した連中が口走る戯言を聞けば、彼らがどんな超人になってしまったのかは瞭然だろう。

「ヒッグス粒子の観測方法がわかったから、センサーを改造して」

「脳の一部を意識的に再結線してゲージ粒子に干渉できるけど、どうする？」

「加速器改良してホーキング輻射を抑制した小質量カー・ブラックホールを作りたい」

「800nm程度のワームホールなら開ける方法見つけたよ」

これらの発言は、慣性無効化装置や重力干渉装置、ミニブラックホール発電機、ワープ航法ができると言ってるのと同じなのだが、研

研究者は大真面目だった。エンセ以前なら狂人呼ばわりされても無理はなかっただろう。

まあ、確かに研究所の設備を活用すれば実際に製造できるだろうが、そういった装置が理論から予測される誤差の範囲内で正常に作動することは判りきっている。どうしてわざわざ実物で確かめる必要があるだろうか？

それより、私には気になることがあった。

エンセ以降の一連の変事の原因、正確に言うと、脳を人為的に改良したのは何者かという疑問だ。

先日復活した新生インターネットの掲示板（非接触ポータルによる五感通信機能を備え、みな圧縮言語を用いている）では、空軍のデータベースに残っていた隕石の記録から敷衍して、地球近傍から発射されたナノマシンが人間の脳を改造したとの見解が主流だった。

有志グループがちよっとした数学的裏技を思いついたおかげで、地上に設置された天文台から大気の揺らぎを補正して全天の精密な探查を実施し、月面の北極で有意性地形を発見していた。

またあるグループは、人間の脳からナノマシンの分離に成功していた。あるグループは、先日誰もが知るようになった大統一理論の無数の応用方法をネットで配信していた。それらの成果を用いれば、産業廃棄物の山から月ロケットを形成させて、それに乗って直接確かめに行くこともできるだろう。しかし、より簡便な方法があるはずだった。

——ワームホール？そうだ、これが使えるかもしれない。

M d a y + 1 8 2 d a y

月に潜んでいた異星人の探查機への奇襲は予想外なほどに上手くいった。アメリカ大統領が指名した補佐官が直接指揮した作戦で、我々人類は異星人と彼らの知識、テクノロジーについて多くを知ることができた。大戦果といって良いだろう。また、作戦は大きな安堵

を人類にもたらししてくれた。

なぜなら、少なくとも数千年前から恒星間をまたにかけるといって、未だ遠隔ワームホールセンシングはおろか、点重力ドラッグすら知らないことが判明したからだ。人類の遺伝子に記載された予定調和コードやメタ進化コードのことも知らずに、よくもまあ手荒に我々人類を改造してくれたものだ。人類に比べたら決して優れた知力・想像力があるとは言えないのに、なんと傲慢な種族だろうか。

今回人類にちょっとした掛けを掛けてきた連中は、銀河系という猿山の頂点を極めようともがいている創造性に欠ける種族の中のいちプレーヤーに過ぎないようだ。ならば、人類がこの銀河系において主導的立場を独占するのを前提に外交政策を練るのも、あながち荒唐無稽とは言えまい。

さて、これからどうしようか。手始めに地上から貧困をなくす？人口が半減してしまった今でなくとも、その程度は兎戯に等しい。我々が獲得した形質が確実に遺伝するように手を打ち、廃熱しやすいように脳血管の設計も変えて。ついでに老化という最大の病を治療してからの方が良いだろう。その次は？我々を改造してくれたお礼参りをしに行こうか。それとも。

時に西暦2000年2月。来るべき新世紀が、少なくとも人類にとってとは寿ぐべきにもなるだろうことは疑いないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6894o/>

Newtype

2010年11月3日19時18分発行